

# 特集

## 一宮高校地学部のコロナ禍 3 年間

高村 裕三朗（愛知県立一宮高等学校）

### 1. コロナの影響は突然に

2020 年 3 月それは突然やってきた。休校である。力が抜けた。教員って生徒がいればこそである。YouTube で教材の動画配信となったが、後のアンケートでは、80-90%の生徒の視聴であった。学力格差拡大と心配になったが、そこまで長い期間ではなく、5 月 25 日授業は再開された。

### 2. 発表会・合宿

地学部が参加してきた各種発表会は、中止・リモートの嵐となった。20 年は、日本天文学会ジュニアセッション（筑波大学）中止に始まり、JpGU（地球惑星科学連合大会）7 月に延期しリモート、天文高校生集まれ！（大阪教育大学）中止、SSH 東海フェスタ（名城大学）中止、自然科学部交流会（名古屋大学）動画提出、高文連天体観測研修会（スターフォレスト御園）中止、AIT サイエンス大賞（愛知工業大学）論文提出のみ、理科学研究発表会（東海学院大）中止、プラネタリウム公開（本校）中止などである。

21 年は、日本天文学会ジュニアセッションリモート、JpGU（日本地球惑星科学連合大会）リモート、天文高校生集まれ！リモートなどあげればキリがない。逆にこんな多くの大会に今まで参加してきたことにも、少しやりすぎてきた感もある。

なかでも夏合宿の中止が、活動上は痛手である。まず本物（天の川と流星）に触れ、それから研究は始める。これが合言葉のはずであったのに、本物を知らない地学部員達である。

思えば 19 年の合宿は OB 参加過去最高人数となり、大変な賑わいであったのに、中止

というギャップである。でも仕方がない。やれることをやる、しかない。



図 1 19 年度合宿は大人数だった

### 3. 観測会は

20 年度の観測会は、制限付きで認められた。しかし、積極的に回数を増やすことには消極的になる。週末に朝まで観測会、翌週から部活動で集団感染はシャレにならない。

必然的に居残り観測を増やす。ネオワイズ、火星、月食などはこの手でなんとかデータを得る。朝までの観測会は、手指消毒・個食徹底の上、2 回だけ実施した。天候のこともあり、計画 6 回、実施 4 回程度の例年から半減である。



図 2 居残り観測

### 4. 中学生向け学校説明会

20 年度の学校説明会は、例年 8 月出校日の

午後1日だけの開催であったが、9月に延期し、土曜日2回の分散実施、さらに保護者の参加はお断りで実施された。地学部は定員を減らし、手指の消毒を徹底して、ショートプラネタリウムを物理講義室のスクリーンに投影した。19年度は立ち見続出であったが、いかにも閑散とした感じであった。



図3 左19年、右20年学校説明会

### 5. 対面の発表会

20年度では、12月科学三昧あいち（岡崎カンファレンスセンター）だけは、関係者のみの無観客、2週間体温を記録して提出、ブースには間隔を取って、マスク+シールド越しという条件で、対面の発表会が実施された。少し聞き取りにくいですが、それでも対面での実施はありがたいものであった。



図4 科学三昧あいちでの発表

### 6. 21年度は少しずつ

相変わらずリモートの行事が多いのだが、21年度になると少しずつコロナ対応に慣れ、学校行事では、修学旅行は20年5月→21年1月→5月と再々延期で何とか実施されたり、学校祭も保護者の見学をお断りして実施した。

地学部も前年と同じく、回数を押さえての観測会、居残り観測を実施した。21年11月「限りなく皆既に近い部分月食」という長い名前の月食は、テスト期間につき、生徒は居残り観測8:00まで、補正データは顧問で取得した。ターコイズフリンジの色がテーマとなり、天文学会JSの発表用データとすることができた。

### 7. プラネタリウム公開を再開

21年度は10月と12月にプラネタリウムの小学生向け公開を再開した。実に休校以来1年半ぶりの実施となった。小学生にとってもこういった無料のイベントは、久しぶりであったのであろうか。10月は7回公演28人、12月は9回公演40人という満席状態となった。コロナ対策は、手指消毒、ラップを張ったポイを目に当てての望遠鏡体験、外の光が入らずに換気できるシステムを製作し、部屋の換気の増強、スリッパやアンケートの鉛筆を消毒した上で、少人数で上映した。申し込み1グループ2-5人に対して、最大2グループ6人を定員とした。



図5 少人数でプラネタリウム上映  
この回は2名だけで上映している

番組上映の前後の待ち時間には、望遠鏡体験に加えて、星のジグソーパズルなどを体験してもらって楽しんでもらう時間を作った。アンケートでは、感染対策の項目で100%の高評価を得られた。



図6 望遠鏡体験とポイ



図7 星のジグソーパズル

### 8. AITサイエンス大賞（愛知工業大学）

21年12月AITサイエンス大賞は、感染対策万全の上、対面で実施された。地学部は、「プラネタリウム公開継続に向けて」を社会科学・地域づくり部門で前述の内容の報告をした。数少ない対面の発表会に感謝である。

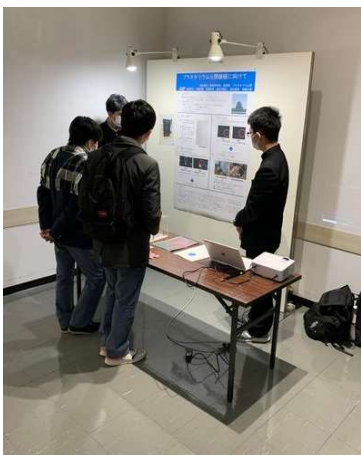


図8 AITサイエンス大賞での発表

### 9. コロナの影響から合宿代替措置

気がつけば、22年度の3年生は合宿経験がなく、本物の星空（天の川・流星）を見ていないのであった。

また、部員も22年度が1年5人、2年4人、3年9人であり、23年度も1年5人、2年5人、3年4人という状況で部員数はコロナの間になぜか減少していた。

ここは、少人数を逆に合宿の代替イベントを計画するしかないと思った。早速管理職に交渉を開始し、校内観測会を校外観測会とし、自分が設置した岐阜県ひるがの高原観測所で観測会を計画した。

最大生徒5人+顧問2人、キャンセル料が発生しないこと（当日発熱等対応）、事前に抗原検査等の条件で、晴れる日にしか実施しない学校での観測会のスタイルで許可を得た。

ある意味日時の固定された3泊の合宿より効率化のメリットもあり、確実に本物の暗い空を体験させられる。

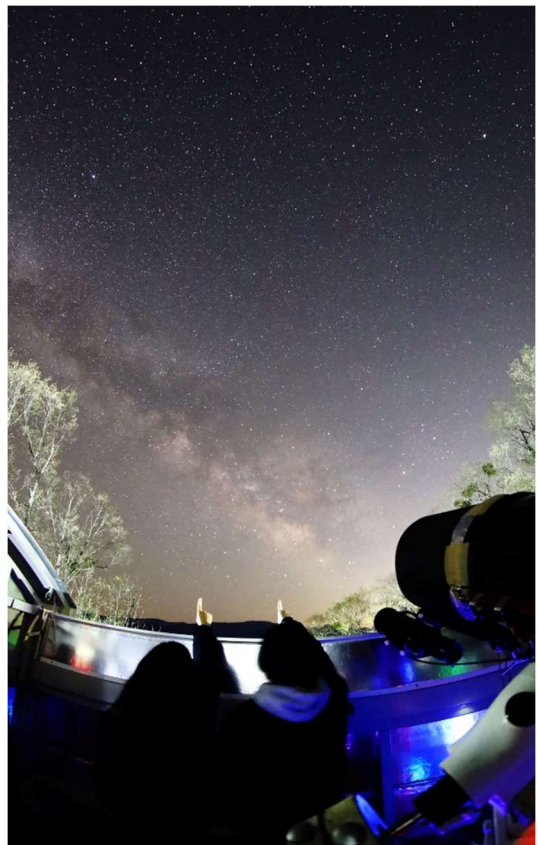


図9 校外観測会で見た天の川

22年GWに3年生3人、4人と2日で何とか実施でき、無事暗い夜空を体験しての引退を迎えさせられた。1-2年は夏休みに実施したが、生徒は大喜びであった。23年度も夏休みに計画中である。

## 10. 今後は

今年度は、ほぼ全ての発表会が通常開催予定である。JpGU(幕張)、天文高校生(大阪)、SSH生徒研究発表会(神戸)、SSH東海フェスタ(名城大)等が予定または実施済である。自分は再任用最後の年で、来年度引率資格がないことから、引継ぎの意味で引率は次の顧問に依頼し、一部の発表会は自分が引率する。合宿は、大部屋は多分ダメとなるであろうか

ら、当面校外観測会になるであろう。顧問から離れても、観測所に来てもらうことはウェルカムである。

今後も やれることをやる しかない。



高村 裕三郎

youza@nifty.com

\* \* \* \* \*